



125号

2007/7/1

日中文化交流市民サークル‘わんりい’
東京都町田市能ヶ谷町1521-58 田井方
〒195-0053 TEL&FAX:042-734-5100
<http://wanli.web.infoseek.co.jp/>
Eメール:wanli@jcom.home.ne.jp



‘わんりい’125号の主な目次

北京雑感その(16)「市民生活」……………2
 私の調べた四字熟語(14)「捲土重来」……………3
 「陝北女娃」通学路(3)とあとがき……………4
 中国を読む(43)「漢方小説」……………6
 韓国ドラマを旅するII……………7
 四姑娘山・写真だより(2)……………8
 ラオス 山から便り「ナーニーと絵本」……………9
 私の四川省 一人旅(7)(稲城 2)……………10
 スリランカ紹介(10)「ジェフリー・パウワーの別荘」…12
 松本杏花さんの句集「余情残心」より……………13
 アフリカとの出会い(18)「アフリカのワーキングプア」…14
 【活動報告】「インドネシア料理講座」……………15
 ‘わんりい’掲示板……………15～16

♪「中国語で歌おう!会」7月と8月の歌 ♪

「昴-すばる」(谷村新司 作詞作曲)

6月に引き続き「昴-すばる」を練習します。復習を
しますので初めての方も大丈夫です。

於:まちだ中央公民館7F・第一音楽室

町田東急裏109ファッションビル7F
JR横浜線町田駅八王子寄り改札口徒歩2分
小田急線南口徒歩5分

7月13日(金) 19:00~20:30

*参加される方は録音機をお持ち下さい。

指導:趙鳳英 (zhào fēng yīng)

8月予定:8月24日(金) 19:00~20:30

指導予定曲「雪絨花」(エーデルワイス)

*「サウンド・オブ・ミュージック」より 中国語歌詞:13p

●「中国で歌おう!会」参加者募集中!

於:まちだ中央公民館

毎月1回、主として第3金曜日開催(変更もあります)

19:00~20:30 会費(月1回):1,500円

体験無料

*初めてご参加の方は、会場、日時など‘わんりい’
事務局へお確かめ下さい。

●7月定例会 7月14日(土) 田井宅 14:00~
*8月のおたよりはお休みです。したがって、発送
日はありません。

●8月定例会 8月20日(月) 田井宅 13:30~

●9月号のおたより発送日 8月28日(火) 13:30~

会員の皆さんはどなたでもご参加で来ます

お元気でよい夏を過ごされますことを祈っております

〈水上の交易〉 タイ国ダムヌアンサドアクにて 撮影:田井光枝

一年の半分を北京で暮らしてみても、北京は物価が安く暮らし易い所だと実感していますが、最近では、豚肉や卵の値段が著しくあがって、政府が値上げ幅を低く抑えようと必死になっていると伝えられています。北京の物価が安いと言っても、日本円に換算してみると、日本の平均所得で生活する時の話であって、北京市民にとっては、そこそこの物価だったのでしょうか。それが、私が見聞したここ5、6年の間に、物価はじわじわと上昇して来ていました。

まず、タクシーの値上がりです。初乗りの10元こそ変わりませんが、追加距離あたり、以前は1.2元と1.6元の2種類あったのに、徐々に1.2元の車を見かけなくなり、一昨年、新しい車両が導入されてからは、一律2元になってしまいました。（*1元≒16円）

夏になると、産地から大きなトラックに山積みして来て、テントに寝泊りしながら全部売りつくすまで頑張るスイカ売りも、以前は、500g3角から4角だったものが、だんだんに値上がりして、昨年は8角というのが一般的でした。今年は、果たしていくらになっているでしょうか。勿論、この値段は時期や場所によっても異なりますが、確実に高くなっているのは事実です。ハッキリした値段は分かりませんが、卵の値段も、2、3年まえから“高くなった！”と言う声を聞いていました。

今まで、いろいろな物が少しずつ高くなっていましたが、新聞で取り上げられることは無かったと思います。このたびの新聞報道は、値上がりしたのが、市民生活の必需品である豚肉であったことと、今までの物価上昇が市民の許容の限界を超えそうなことから、政府が物価抑制の姿勢を鮮明にする必要があったためではないかと考えます。

確かに、日本人の平均所得は、北京市民の平均所得より高いので、今、豚肉が幾ら位に値上がりしているのか分かりませんが、まだ日本より安いと感じることでしょう。一部の中国人は、平均的日本人よりずっと多い収入を得ているので、そういう人々にとっては、北京は、まだまだ暮らし易い街です。しかし、大部分の北京市民は、平均所得が何百元かで暮らしているため、利用頻度の高い豚肉の値上がりは、生活に重大な影響をもたらします。

北京オリンピックに向けて、マンションや別荘地の値上がりが話題になっていますが、一般市民には関係の無いことで、タクシーの値上がりも、利用しなければいいのですが、食料品は、高くなったから買わない、と言うわけにいかないため、市民の生活を護る行政府と

しても放置出来なくなって来たのでしょうか。政府の努力で、物価がどのあたりで落ち着くのか、今年もこれから北京へ出かけますので、しっかり見てきましょう。

ところで、一般の北京市民の収入はどの位がご存知でしょうか？ 私の友人たちは、どちらかと言うと、北京では収入の多い部類に属していますから、彼らの生活を平均的市民のものと言うことは出来ません。一つだけ、平均的市民の収入を知るヒントは、お手伝いさんに関する情報です。

北京で中流以上の生活をする人々は、よくお手伝いさんを雇います。お手伝いさんとして働く人々は、地方の出身者が多く、北京では安徽省の人を多く見かけます。その他にも、河南省とか福建省の人達もいます。また、雇い主の故郷から、親せきの紹介でやって来る人達もいます。親せきの紹介で来る人を除き、一般のお手伝いさんは、お手伝い紹介所に籍を置いて、雇い主が現れるのを待ちます。

お手伝いさんを雇いたい人は、紹介所に200元ほどの手数料を払って、人を回してもらいます。若し、来たお手伝いさんが気に入らなかつたら、1年間に限り、何回でも違う人を紹介してもらうことが出来ます。これは住み込みのお手伝いさんで3食付、初任給は、現在、600～700元程です。この金額も、4、5年前には300～400元でしたから、随分あがったことになります。

お手伝いさんのもう一つの形態は、北京に所帯を持っている人が、時間単位で働くもので、現在の時給は7元程です。これも、私が知った時は、時給2元でしたが、瞬間に、4元になり5元になり、今は7元です。こちらの方は、1時間単位で、何曜日と何曜日に何時から何時までと約束をして働きます。人によっては、朝から自転車で走り回って、一日に2軒も3軒も掛け持ちをします。食事や寝るところは自分で負担しますが、一日に7時間も働けば、1ヶ月で1000元以上になります。北京市民の平均所得よりも良いようで、夫婦で働いて、子供を大学に上げ、故郷に家を建てる人達もいるそうです。現在北京では、大学を卒業した人達の就職難が深刻ですが、お手伝いさん市場に関しては、需要も供給も拡大しつつあるように見えます。

大学卒の初任給でも、1000元以下が多いので、平均的な北京市民にとって、北京の物価は特別安いわけではありません。所得の伸びが物価の上昇に追いつかなければ、市民の生活はますます苦しくなります。物価の鎮静化は、政府の最大の責務と目されます。

「ちょう」は「重」の漢音。「捲土」は土煙をまき上げること。勢いのものすごいさま。「土を捲き、重ねて来る。」と読み、「一度敗れた者が、再び勢いを盛り返し、捲きかえしてくること」という意味になります。「人生に挫折はつきものかもしれません。それでも諦めずに捲土重来を期することが大切なことです。」

「今年は合格出来なかったけれど、捲土重来を期して来年こそは頑張るぞ！」
 などのように使われます。

辞書には次のように載っています。

三省堂「現代国語」は、「捲土重来：けんどじゅうらい 一度、敗れた者が、ふたたび、勢いをもりかえしてやってくる。けんどちゅうらい。」

小学館「中日辞典」は、「卷土重来：捲土重来けんどじゅうらい。勢いを盛り返してもう一度やってくる。」

日本語、中国語とも殆ど同じ意味に使われていることが分かります。

出典は晩唐の詩人、杜牧（脚注）の「烏江亭に題す」という「杜牧詩」です。

勝敗は兵家も期すべからず
 羞を包み恥を忍ぶはこれ男兒
 江東の子弟才俊多し
 捲土重来いまだ知るべからず
 漢楚の戦いで敗れ、自ら命を絶った、項羽を思つて詠んだ詩です。

「勝敗のゆくえは、兵法家でさえも予測はつかない。羞を包み、恥を忍んでこそ真の男子といえるだろう。（項羽の本拠地である）江東の若者には、すぐれた人物が多い。捲土重来していたら、結果はどうなっていたかわからない。」とう意味です。

天下に覇を競った項羽ですが、漢楚の戦いでついに漢軍に垓下で包囲されるところとなり、ここで「四面楚歌」の危機を脱したものの、従う者わずか26騎のみとなって烏江という長江（揚子江）の北の町までたどり着きます。江

を渡れば、そこはもう故郷の楚です。

烏江には、亭（宿場）があり、その亭長が項羽を迎えて舟を用意し、

「江東小なりといえども、地は方千里、衆は数十万人、亦王たるに足るなり。願わくは大王急ぎ渡れ。今独り臣のみ船有り。漢軍至るも以って渡ること無からん。」

と言って、江を渡って江東に帰り、再起を図るよう勧めました。

しかし、項羽はこれを潔しとせず、「天の我を滅ぼすに、我何ぞ渡ることを為さん。」と言って亭長の申し出を断り、愛馬 騅を亭長に与えると、敵中に切り込み、遂に力尽きて自ら首を刎ねて死にました。このとき項羽31歳でありました。

冒頭の詩は、杜牧 が烏江 の地で、項羽の早すぎる死を悼み、一時の恥を忍ぶことができれば、項羽の軍事的才能と江東の人材をもって、再起は可能だったのではないかという気ちを詠んでいます。

ちなみに、杜牧が詩を詠んだ晩唐のころは、項羽の死からすでに千年の年月が経っています。日本はまだ平安時代初期でした。

以上見てきましたように、「捲土重来」は漢楚の戦い、項羽に由来する故事成語です。登場人物、時間的な流れという点において、「私が調べた四字熟語」第2回「乾坤一擲」、第6回「四面楚歌」とあわせて読んで頂くと繋がりが分かりやすいと思います。

私が調べた四字熟語 14 捲土重来（けんどじゅうらい）けんどちゅうらい

三澤 統

〈注記〉

杜牧： 杜牧（とぼく、貞元19年（803年）－大中6年（853年）は中国、晩唐期の詩人。京兆・万年（陝西省）の人。字（あざな）は牧之（ぼくし）。号は樊川。

晩唐の繊細な技巧的風潮を排し、平明で豪放な詩を作った。風流詩と詠史、時事諷詠を得意とし、艶麗と剛健の両面を持つ。七言絶句に優れた作品が多い。

杜甫の「老杜」に対し「小杜」と呼ばれ、また同時代の李商隱と共に「晩唐の李杜」とも称される。祖父に中唐の歴史家・杜佑を持ち、詩人の杜荀鶴は庶子と言われる

出典：フリー百科事典『ウィキペディア (Wikipedia)』

2007年特別企画 〈大唐王朝290年〉 講師：莊 魯迅

290年の統治を誇った唐代に焦点を絞り、人物、政治、経済、文化、軍事などに渡って系統的にその全貌を掴む、全6回の講義
 (5/26—6/23 7/21 9/22 10/27 11/24)

7月21日 第三講 政治・文化篇

- 1. 唐代の政治、経済、民族事情
- 2. 諸国との外交関係、日本との交流

* 全講義内容の詳細は、同封スケジュール表をご覧ください。或いは末尾の岡村景孝氏にお問合せ下さい。

- ◆ 場所：台東区民会館会議室9Fなど (☎03-3843-5391)
 東京メトロ銀座線浅草駅・東武伊勢崎線浅草駅より徒歩3分
 都営地下鉄浅草線浅草駅より5分
- ◆ 時間：13：30～16：00
- ◆ 受講料：1回2,300円 ◆ 最小催行人数—30名
 * 講義の日程や会場の都合により、内容の変更があります。
- 主催：長江の会
- 申込み・問合せ
 mail@k-okamura.com (岡村景孝)
 ☎090(2328)4723 (岡村景孝)

●6月号の‘わんりい’が届かなかった皆様へ

6月号の発送後、例月より20数部の残数があり発送に手違いがあったかと推測しています。許されない不注意で、届かなかった皆様には深くお詫び申し上げます共に、電話又はその他の連絡方法で‘わんりい’事務局までご連絡頂けます様お願いします。早速にお送りいたします。

私はフィルムが全て終わるまで、カメラで去ってゆく子ども達の姿を写し、ビデオの電池もすっかり終わってしまいました。既に3時を廻り、私もまた疲れ果ててしまいました。この日の天気は余りよいとは言えず、風も強くて埃っぽく、見通しもよくありません。けれども一緒に歩き写した写真は真実の姿です。この地の人でなければ想像もできないでしょう。

その夜は劉家山村に宿泊を予定しており、折りよく劉家山村に行くロバ車が通りかかりました。親切な若者は私を乗せてくれたばかりか大きな林檎をくれました。その爽やかな甘酸っぱい林檎を一口齧ってみて、私は朝の9時からこの時間まで何も食べたり飲んだりしていなかったことに気づいたのでした。

二ヵ月後の2003年4月30日、私は再び伏羲河村を訪れました。次の日は労働節なので子ども達はきっと学校から村に戻ると確信して、私は捷路砭で待ち受けていました。

一番最初に捷路砭に現れたのは延峰で、続いて慶慶、芳芳と向麗です。延峰の理想は大きくなったら洋服のデザイナーになることで、きれいな衣服を沢山デザインしたいそうです。慶慶は大学にいて体育の先生になりたい。芳芳は画家になりたいとのことです。向麗も私がずっと撮影をしてきた子どもですが、向麗はまだ幼くて大きな子ども達と一緒に歩いて学校に行く力が十分でないと判断したお父さんが娘を郷の親戚の家に預けていたので、通学の折は彼女はいませんでした。

伏羲河の子ども達は私のここでの仕事が間もなく終わり南に帰ることを知っていて河の砂洲に行き遊ぼうといっていました。

砂洲は勿論黄河の砂州で、伏羲河村は三面を水で囲まれており、黄河の水は伏羲河村の辺りに来ると渦を巻き、大波を沸き立たせ、大量の砂や泥を巻き込んで下流へ流れて行きます。砂洲には彩り鮮やかな、ガチョウの卵のようなさまざまな石が残され、河の中で光り輝いています。子ども達は靴が湿るのも構わず浅瀬の辺りでいろいろな小石を探し回りました。

暫くすると向麗がいくつかの石を手にとりて来て好きなのがどれか訊くので私は二つ選びました。暫くすると慶慶が又いくつかを持ってやってきました。それで子ども達は私のために綺麗な石を拾っているのだと知りました。その時の気持ちをなんと形容したらよいのでしょうか。「小さいの、小さいのね。大きいのは持って帰れないから」と一生



黄河に沿った通学路



黄河で石を拾う少女たち

懸命言って彼女達に気づいて貰うよう努めました。大きいものを選ぶとしたらだれのものを選ぶ方がいいでしょう。それに誰のが一番大きいかということにもなるでしょう。

2004年7月、私は再び土崗郷に行きました。土崗小学校を通り過ぎる時、中に入りたい誘惑を感じましたが思い止まりました。学校はもうお休みで子ども達は家に帰ってしまっているでしょうし、たった一年の間に学校の教室や設備、寝室が変わったとも思えません。子ども達は相変わらず次々とここに時間をかけて通って来るでしょうし、卒業後は次々と県の中学に進学したり、自分の村や他所に出て仕事をするようになるでしょう。山里の子ども達はこのような生きてゆくのですね。彼女たちの父母や祖父母と同じように善良で純朴ですし、幼い頃から勤労の習慣や苦勞を耐え抜く精神を養っています。

《陕北女娃》の中の子ども達の今後はどのようなのでしょうか。彼女達の中で誰か自分の夢を実現するのでしょうか。何年かしたら、皆と会いたいものです。(完)

(2004年8月15日)

これは童話ではありませんし、物語でもありません。実在の人々と実際の出来事なのです。子ども達それぞれが純真な心の扉を開いて自分たちの生活や未来への希望をあなたに語っているのです。

黄土高原の人々は母親のような大らかさで小事にこだわりません。春秋戦国時代の晋の文公・重耳は、晋国の内乱のため志を遂げられず落ちぶれてこの地に辿り着きました。人々は彼を受け入れ、彼は12年という歳月をかけて英気を養い、再び力を得て遂には中原の霸王になりました。

公元755年には安史の乱が起こり、ここも深い打撃を受けました。人々の生活は困窮し、多くの餓死者がでました。困窮し流浪の身となった大詩人・杜甫は家族を引き連れ黄土高原に足を踏み入れました。人々はいつもどおり黙々と彼等を迎え入れました。杜甫は深く感動し、「暖湯濯我足、剪紙招吾魂」(暖かいお湯で足を洗い、この地の民間藝術である剪紙は私の魂を蘇らせた)という詩句を残したと伝えられています。

陝西省延安市はかつて‘肤施’と呼ばれていました。尸毗王という仏に由来があります。言い伝えでは、ある日尸毗王が清涼山の上で修行をしていると、突然一羽の鳩が慌てうろたえ難を逃れようと彼の懐に飛び込んできました。一羽の老鷹が鳩の後ろに迫っているのです。しかし老鷹は飢えてやっと飛んでいるといった有様です。仏はすぐさま自分の肉を割き鷹に与え、二つの命が救われたのです……紅軍は延安で13年間滞在して休養しつつ、壮大な夢を実現する機会を待ちました。そして遂に力を得ると果てしなく続く黄土の台地を出発し、自分たちの理想を象徴する五星紅旗を中華人民共和国の空にひるがえしました。

それから60年以上の歳月が過ぎ、黄土高原は憔悴ししかし慈愛に満ち、身を削って子どもを育む母親のような状態です。人々はいまだ貧しい日々を送り、いまだ毎日‘東山的日頭背到西山’ (朝から晩まで農作業にいそむ) の生活を送り、ひと言も恨み言をいうことはありません。世々代々、年々月々、この地の人々の生活はひたすら黄色い大地で食べ物を生産し、家族を養うことで精一杯です。彼等は祖先に日陰を与えてくれた大樹を失ってしまっているのです。彼等に残されたのは疲れきり痩せ細った土地だけであり、彼等が受け継いだ大自然は生態系のバランスを失ってしまっています。彼等は為す術もなくひたすら願うことは平安で穏やかに一生を送ることであり、娘達が生活に困らないような人の所に嫁げることです。

二十年前、初めてこの陝北の地を訪れた時、私は新鮮な驚きの気持ちで一杯でした。道端に打ち捨てられた窑洞の傍らに立っていた女の子は、色白で大人しくはにかんだよ

うに私を見、聞き分けよくポーズをとって私に写真を撮らせてくれました。しかし、私は写真を撮るとすぐにその場を立ち去ってしまい、後になって彼女の心にはどんな願いごとがあったのだろうかという疑問を持ち続けることになりました。その後、十何回か繰り返し訪れ、またこの地に二年間を駐在した折にも無数のこのような何かを願うような眼差しに出会いました……。

このような眼差しに出会う度、私は自分の娘のことを思い出しました。私の娘は病院の無菌室で生まれ、当地の女の子は自分の家のオンドルの上で生まれます。私の娘は何文字か書いただけのノートをもういらないと捨ててしまいましたが、当地の女の子は木の小枝で地面に文字を書くしか出来ません。私の娘はオヤツをご飯代わりに食べますが、当地の女の子は一日わずか二回のお粥と饅頭だけです。……私がこのような話を娘に聞かせると、娘はビックリしたような目で私が大昔の話をしているのだと思うのです。

新鮮で驚きだったこれらの一切合切の全てを真摯に受け止めるようになり、偶発的でしかなかった私の行為が目的を持つようになりました。つまり、私はカメラで陝北の女の子たちの真実の物語を記録し、心で彼女たちの人生の夢を聞いてみようと思ったのです。七、八年の歳月は一瞬のように過ぎ、私が写した女の子たちは日々成長して行き、生活はいろいろに変化して行きます。しかし、誰が彼女たちの心を知ろうとしているのでしょうか？

私は分厚い原稿を抱え、次々に出版社を訪ねどうしたら出版できるか相談をしましたが結局何やかにやの理由で返却されてしまいました。しかしながら、ある折偶然に私は二人の母親と知り合いました。一人は有名な児童文学作家で、湖南少年児童出版社の編集者である湯素蘭女史です。何気なく言葉を交わしたことで彼女の母親としての心の扉を叩き、即刻、彼女はもう一人の母親 — 湖南少年児童出版社社長・彭兆平女史を紹介くださいました。翌日、私は18回目の陝北黄土高原に子ども達の近況を撮影に行く途中、湯女史から「湖南少年児童出版社が「陝北娃娃」を出版計画の中に入れた」という電話を受けました。この突然の連絡に私はびっくりしましたし喜びました。20日間後家に戻るとすぐ電話をし間違いのないことだと知り、やっと夢ではないことを確信しました。

どうしてこの様に順調にことが運んだのでしょうか。母親の力でしょう！全ての母親の心は相通ずるものがあり、心の深いところに慈愛に満ちた尊い種を持っているのです。陝北の女の子たちの明日について更に多くの人々の関心を持ってもらえるかもしれませんし、それこそは私が数年間精一杯黄土高原の女の子たちの生活と夢を追い続けた記録の発端でもあるのです。(周路)

▶「陝北女娃」を翻訳して

周路氏の父である版画家・周蕪氏は延安魯迅藝術学院で学んだことにより、陝北地方の民間藝術に関心を寄せ、剪纸など民間藝術のコレクションを保有していました。父の興味は周路氏に受け継がれ、陝北の民間藝術に並々ならない興味をつのらせてこの地方に通ううち、2年にわたる陝西省延川県文化局副局長の職を得、現地の民俗風俗を専門的に調査する任に当たることになりました。

草も木も生えず、見晴るかす限り黄土丸出しの厳しい自然環境の村々をひたすら巡り、唯一無二の生業はこの厳しい環境と取り組んで耕作するしかないという人々の生活の中に飛び込んで写真を撮りまくった様子は、「黄土高原来信1部」(2001年～2003年‘わんりい’掲載)の周路氏の現地報告で知るところです。

そのような黄土高原での日々を過ごすうち、自分の娘と同じ年頃の女の子達に不自と目が行き、自分の娘の生活との落差に胸を痛め、陝北の女の子達が置かれている現状を広く紹介したいと、特に印象に残った28名の女の子の生活を撮影するようになったとのこと。

周路氏の思いがけない、湖南児童出版社から2005年5月、氏が追跡した少女たちの写真を纏めて「陝北女娃」のタイトルで出版されました。本はどのページも、厳しい生活環境に

も拘らず明るく健気で可愛らしい少女たちでいっぱいです。どの少女も生き生きとした表情で今にも本から抜け出てきそうです。これは現地に住み込んで積極的に彼女達と付き合いながら撮影した氏の見聞の賜物でしょう。

しかし、少女たちの明るさの裏側に、無教養と無知がもたらした悲劇や貧しさのために学校を止めざるを得なかったり、未来を閉ざされる少女たちの存在もあることを伝えています。かような少女たちの現状を目前にして、中国政府が言う「義務教育」とは何かと繰り返して反問する氏の言葉は強く心を打ちます。中国沿岸部の目覚ましい発展を知るにつけ、一刻も早く公平な教育の機会均等を実現して欲しいと彼の国ながら誰しも願うことでしょう。

7月号で「陝北女娃」は完結ですが、2005年10月より約2年にわたって、下手な訳にお付き合い下さった会員の皆様に心からお礼を申し上げます。また、全訳文に目を通して下さり、不適切な訳を指摘し正して下さった、‘わんりい’中国語勉強会の郁老師に深く感謝する次第です。

尚、今年8月、周路氏は昨年から美大で学び始めた娘と共に来日、**久遠的郷土Ⅲ‘黄土風’新作木版画展**(8月16日/木～21日/火)(詳細16p揭示板)を開きます。氏は期間中は会場におります。また、日本語での会話も可ですので、是非お出掛け下さり、交流頂ければと願っています。(田井光枝)

中国を読む(43)



「漢方小説」

中島たい子著 集英社

若年層が酷使されており、過労に追い込まれている…というニュースは、本当だと思ふ。

自身も9時半の始業時間に少し遅刻して入社してから、ほぼ毎日終電生活…。周りの友人たちも似たようなもので、先日の飲み会でも、殆どの同級生たちが22時以降に店に飛び込んできた。

「仕事が終わらなくて…」と口をそろえて言うが、誰一人終わってきた人はいないはず。仕事はすでに終わらせるのが不可能な域に突入。もちろん、体は悲鳴をあげているわけで、私はすっかり慢性皮膚炎だし、Mちゃんは激痩せ、Sちゃんは肩こりが激しく、K君は健康診断で毎回E判定。医者は「ストレスと過労ですね、仕事辞めれば治ります」と簡単に言うが、「はい、そうですか」と退職するわけにもいかない。

そんな私の頭は固い本を読むことを拒否しており、

今回は気分転換に読めるものを紹介させていただきます。この本は書評欄で見かけて気になっていた。「漢方小説」というネーミングも素敵だ。

ストーリーは、31歳の女性が、元恋人の結婚(もちろん別の女性との)を機に体調を崩し、それをきかっけに自分の内面と見つめあい、成長していく…という、とても普通なもの。31歳の主人公はじめ登場人物たちが、過労世代なのにどうしてこんなに暇?という疑問はさておき、東洋医学が分かりやすく書かれていて、その部分は非常に面白い。

東洋医学には、病状を治す以外に、病気の根本を治そうとする意思があるという。根本を治さなければ、それはまた違う病状となって現れる。そして、その病状すら、自分が生み出す変化だから自分の一部だと、小説の漢方医は教えてくれる。そんな考え方は、2000年も昔の中国の医書「黄帝内経」から来ているというから、やっぱり、中国ってすごい。

過労な私たちの話に戻るが、体調不良の根本は働かないと不安になる精神構造にあるのでは。格差社会という言葉に怯え、勝ち組に入るために無理して働いて体壊している時点で、実は負けているのかもしれない。

(真中智子)

韓国の歴史ドラマはほんとうに面白い。特に実在の人物を扱うドラマは衣装・宮殿・背景など、時代考証は手を抜かず、資本も投入しているなあ…と実感させられる。

2006年5月から放映され、当初60話の予定だった『朱蒙』は、あまりの人気(高視聴率)ゆえに2007年3月までの81話に放送延長となった。朱蒙は高句麗建国の祖という。何の知識もなく、ドラマを観始めた。う〜ん、これは韓国・朝鮮の人々にとって自らのアイデンティティーを確認(かと言って民族主義では決してない)し、血沸き肉踊る冒険活劇であり、観るヒトの心の奥底の意識を目覚めさせるドラマなのではなかろうか…。かつて朱蒙という若者が高い志を掲げ、困難を乗り越え信念を貫き、仲間と共に理想を実現、英雄神話として今に語り継がれているのだ。

高句麗19代の王、広開土王の事跡を記した高さ6.39mの石碑がかつては高句麗の都、現在は中国吉林省集安で発見されたのは19世紀、長い間草に埋もれていたのを地元の農民が見つけたのだという。1775文字からなるこの碑文は高句麗の建国神話と広開土王の偉大な功績を後世に伝えるため、広開土王の子、長寿王が建てたものだ。(2004年、集安にある高句麗の王城、王陵、貴族墓、北朝鮮平壤郊外に分布する高句麗の古墳群が世界遺産に登録された。中国政府は広開土王碑を瓦屋根の東屋で囲い防弾ガラスを設置、観光広報と管理に力を入れている。)

この碑文による高句麗建国神話がドラマ『朱蒙』のシナリオだ。それは、中国の歴史書『三国志・東夷伝』、朝鮮の史書『三国史記』に記された年代とほぼ一致する。2100年余り北方の大陸を支配していた古朝鮮はBC108年、漢の武帝の鉄器武装騎馬隊によって崩壊する。国をなくした民衆は流民となり、或いは韓国の奴隷となり、韓国が設置した四郡(楽浪・真番・臨屯・玄菟)制度によって支配されていた。領土は小さな部族国家である扶余、沃沮などを生じるが漢の鉄器軍のために流民を保護することができなかった。

流民の中から漢に抵抗する集団(多勿軍)が現れ、解慕漱を首領としてゲリラ的活動が始まる。しかし、扶余の王と軍師の裏切りによって漢にとらわれてしまう。河伯族の娘、柳花と解慕漱との間に生まれた子が朱蒙だが、解慕漱の親友、後の扶余王となる金蛙の子

として育てられる。やがて朱蒙は父、解慕漱の成し遂げられなかった祖国の空を取り戻すため、あらゆる困難に立ち向かうのだ。知恵と度胸、美貌をも持ち合わせた大商団の娘、召西奴との深い絆に支えられ度々の危機をくぐりぬけ、高句麗の東盟聖王としてBC37年に即位する。漢の手先となった玄菟城の太守との確執や、金蛙王の息子、帶素との宿命の対決は手に汗を握りハラハラしたり、母、柳花の愛に涙したり…。

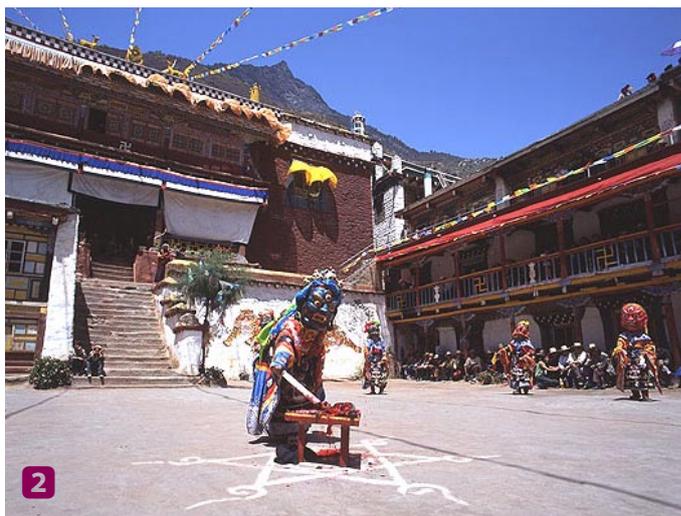
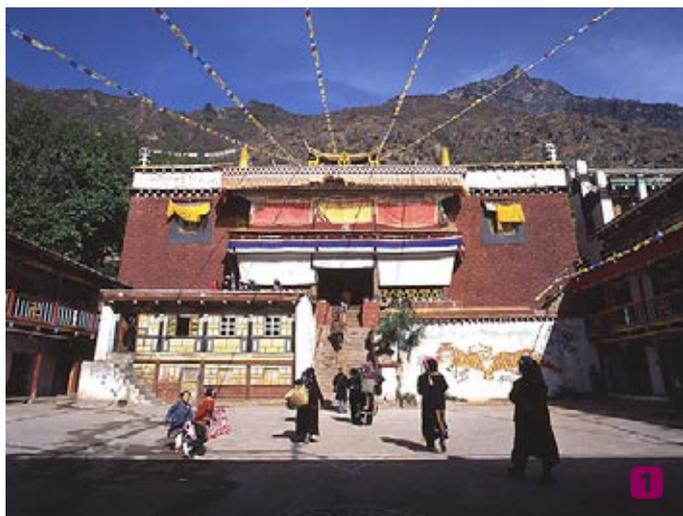
高い志に朱蒙の周りには人が集まる。帶素の部下が朱蒙の人となりに感銘し、多勿軍に参加するエピソードや、漢の鉄器に劣らない鋼鉄剣を作るため、粉骨砕身努力するモパルモ。国の運命や人の運勢を予言し、病気回復や天候を天地神明に祈る重要な役どころの神女ヨミウル。そして、まだ天命を知らぬ若き頃の朱蒙と知り合い、最後まで生死を共にする3人組摩離、烏伊、陝父。彼等への責任と義務を朱蒙は担っている。現代の管理職は、保身に汲々として、口を開けばパワーハラメント！朱蒙を見習えと言いたい。

さて、朱蒙という名は“弓の名人”という意味だそうで、彼のアクションシーンはなかなか見ごたえがある。鉄器騎馬隊を打ち破り、多勢に無勢も何のその、知力攻略マジックも使いこなす。

即位後15年、死んだと思っていた朱蒙の息子、瑠璃の出現により、王妃となっていた召西奴は辛い決心をすることになる。この決心が百済の建国へと繋がってゆくのだ。

朱蒙自ら戦いの先頭に立ち、刃の嵐をくぐり、山や谷、草原を駆け抜けた20余年。彼は40歳の若さでこの世を去った。扶余国では不吉とされた三足鳥を旗印に命をかけて取り戻した領土と人心、栄光。韓国ドラマの醍醐味を味わった。しばらくは何も観れない、あのシーンこのシーンが頭の中で繰り返す。深い歴史、生活習慣や文化の違い、言葉はアルタイ語圏の膠着言語で文法は日本語と似ているが、三国時代までの王の立場や城のつくりは全く違う。王は解決能力がなければ部族長や貴族の会議によって別人が人選されるし、城は権力の象徴ではなく、いざ戦いになれば民を守る砦となるのだ。

もうすぐ高句麗19代王、広開土王のドラマ『太王四神記』が放送開始となる。ああ、期待する日々。



前回は四姑娘山の麓行われる質素な山神祭りをご紹介しましたが、今回は下流の丹巴に有るボン教の寺のお祭りを簡単にご紹介します。

丹巴北部に在るこの寺は1500年位の歴史を持ち、領主の庇護の下に長く戦禍を避けて来たため古い伝統を継承しています。元々私がこの寺に興味を持ったのはお祭りではなく、庫裏に伝承されていた女神の壁画です。この女神はヤクに乗り生命を与える薬瓶を左手に持っています。また本堂外壁には、ヤクに乗り生命を集める矢を右手に持った女神の壁画が伝承されています。

これらの女神の様式はシャンシュン(吐蕃以前に栄えた国でインド北部のラダックからチベット北部の高原地帯まで勢力が及んだ)で信奉されていた女神の一つに酷似しています。この話に首を突っ込むと長くなってしまいますので、この辺にして祭りの話に移します。

祭りは3日間で、初日は読経の下に地元の人達が集まって来て祭りの準備をします(写真1)。

2日目が祭りの核心部で各種の奉納舞踊が行われます。写真2はそのハイライトで生贄を神に捧げる儀式です。元来は生きた生贄を使いましたが、今は作り物の心臓に赤い塗料を封じて使います。

3日目は寺の住持が近在の人達に福を授けます(写真3)。

元来、ボン教の寺の住持はその土地の領主の親族が務める事が多く、この寺の住持もかつての領主の親族で、現在でも地元の人達から厚い信望を集めており、体制が変わっても昔ながらの習慣風俗が保たれています。

場所は異なりますがボン教の寺の祭りのビデオが幾つか市販されていて、下記のサイトもその一つを紹介して



います。ご興味が有れば問合せ見て下さい。

▶ kawachen homepage: <http://www.kawachen.org/>

なお古い伝統を持つボン教の寺の僧は、普段は実家で農耕をして行事が有る時だけ寺に戻ります。そのため行事が無い時期に行くと門が閉まっていたり、留守番が居ても本堂に入れない事が多々ありますので注意が必要です。

【'わりい'の原稿を募集しています】

原則として、2月と8月を除く毎月発行の会報'わりい'は、会員の皆さんから寄せられた原稿でまとめられています。体験された楽しい話、アジア各地で見聞した面白い話などなど気楽にお寄せいただければと願っています。皆さんの投稿をお待ちしています。

*紙面が16Pと限られていますので、掲載まで暫くお待ち頂くことがあります。また、紙面の都合で作者のご了解の上、余儀なく手を入れたり、カットさせて頂いたりすることもあります。

ナーリーは、ずっと滞在させてもらっていたサイガウ爺さんの孫娘。今3歳である。ナーリーは毎朝起きるとトコトコ私のところに来て、「ピア・ンダウ・グウ・シャイ(絵本をお話して)」と言う。朝こっちも起きたばかりである。「ほら、ナーリー、まだ顔洗ってないんでしょう。顔洗ったら読んであげる。髪ぐしゃぐしゃ、髪とかしたら読んであげる」などと言うと、お母さんやおばさんのところにすっ飛んで行って、「顔洗って!」「髪とかして!」と。いつもなら髪をとかされるのを嫌がるのに、言うことを聞くのである。ナーリーが顔を洗って、髪までとかしてくるとなると、もう読んであげないわけにはいかない。

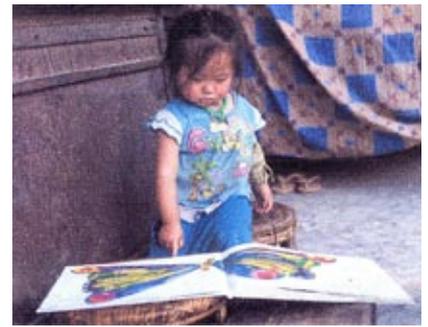
昨年、ナーリーはまだ2歳だった。いつの間にか、絵本を見るようになったが、最初の頃は、「さるとわに」のわにや「さんびきのやぎのがらがらどん」のトロルの絵を見て、「フェ〜ン、怖いよお」と泣き出しそうになっていた。「さんびきのくま」では、女の子がこぐまの椅子を壊して尻餅をつくページになると、「ポンポン・アア(土に落ちこた)」といて、いちいち自分も床にひっくり返った。言葉もまだたどたどしかった。

今年は、ちゃんと言葉が言える。「おおきなかぶ」の絵本では、犬が出てくると「ワンワンワンワン」と言って絵本の前で飛び跳ねてから、絵本を指し、「アオ・ムウ・フウ・ミー・ロー・パ(犬が猫の助けを呼びに行った)」と、まだ口振りはたどたどしくも、きちんとしたモン語の文章を話すようになった。じきに、「スーホの白い馬」がお気に入りの絵本となった。もちろん文章も長いし、私もモン語では、はしょって話すので、全てを分かっているわけではないが、神妙に話を聞いていて、スーホが殿様の家来にぶちのめされて、友だちに負われているページでは、「スーホは痛い痛い。だから友だちが助けたの」と言う。殿様があばれ馬から落ちるページでは、いかにも愉快そうに笑う。子どもって、なんてすごいんだろう・・・ちゃんと大事なところをわかっている。

絵を描くのが好きなお兄ちゃんの真似をして、絵も描くようになった。まだ絵とは呼べないかもしれないけれど、小さな丸を描いては、嬉しそうに、「ルツパア(花)」と言う。いくつか小さな丸を「花、花・・・」と描くので、「大きな花は?」と聞くと、今度は大きな丸を描いて、「大きな花!」と。しばらくすると、小さな丸を描いて、「プー、チョッポー(おなら)」と、お尻を突き出しておならをする真似をする。我ながらこのアイディアが気に入ったらしく、小さな丸を描いては、「プー」「プー」と言って大笑いしている。私も一緒に大笑い。そうかと思ったら、今度は、線を長く引き、「ツォッゲー・パイ・ホンヒエン(学校へ行く道)」と。そして、小さいびつな丸を描いて「学校へ持っていく鞆」と

言う。ナーリーは当然、まだ学校へ行ってないけれど、お兄ちゃんのトゥーローが、毎朝、鞆を持って、学校に行くのを見ているのだ。また線を引き、今度は「ツォッゲー(道)ピーピー(車のクラクションの音)」、次は線を描きながら「ツォッゲー(道)ポーポー(意味不明)」・・・

まったく、子どもは面白い。



「はらぺこあおむし」を見るナーリー2歳

【ラオス山の子ども文庫基金】

ラオスの山の子どもたちのところに、絵本やお話がたくさんつまった小さな建物を作って、みんなが集まる、楽しい素敵なお場所を作ろう！子どもたち、村の人たちの世界を広げる拠点を作ろう！その実現のため、2004年7月から任意団体として活動を始めています。

年会費：一口 2000円

郵便振替口座 ラオス山の子ども文庫基
00160-6-482100

事務局：166-0015 東京都杉並区成田東5-29-21 安井方

E-mail:kiyokoy@laotel.com pajhnbu@jcom.home.ne.jp

HP : <http://www7a.biglobe.ne.jp/~laosyamanoko/>

*「ラオス山の子ども文庫基金のホームページは‘わんりい’のホームページにもリンクされています。

‘わんりい’のおたより会員継続の お願いとお誘い

年会費：1500円 入会金なし

郵便局振替口座：0180-5-134011‘わんりい’

毎年、4月は‘わんりい’おたより会費更新月です。継続会費(1500円/年)の納入(上記)をお願いします。新規入会も歓迎します。

‘わんりい’の名は、‘万里’の中国読みから付けられました。文化は万里につながるの想いからです。

主としてアジア各地から日本に見えている方々と協力し、講座、研究会、鑑賞会、展覧会等を開催しています。また、2月と8月を除いて年10回、会報‘わんりい’を発行しています。

入会はいつでも歓迎しています。会費は、おたより制作費と送料及び活動のサポートに当てられています。活動の様子は、おたより又は‘わんりい’HPでご覧ください。

問合せ：042-734-5100 (事務局)

「他にも垂丁に行きたいってヤツがいたら、俺に電話してくれ」彼は私に名刺を手渡した。やっぱりみんなと同じワンパターンの車の絵の名刺だ。名前のところには『次仁扎西』とあり「シャーレンザーシー」と読むのだと言った。彼はチベット族の人間なので、漢字は単なる当て字なのだろう。

垂丁までの車も決まった事だし、お腹がすいていた。外に出て行こうとすると、「どこに行くの?」と次仁扎西(シャーレンザーシー)こと運転手のお兄ちゃんが聞いた。

「食事に行くの」

「俺もまだなんだ。一緒に行くよ」

一見昭和のチンピラ風に見える彼は、話してみると割に人の良さそうな田舎のお兄ちゃんという感じだった。帽子を脱ぐと坊主頭で、浅黒い肌にグリグリした目のジャガイモみたいな顔だ。間延びした不明瞭な中国語は外国人の私が聞いても田舎なまり丸出しだった。私とはといえば埃まみれの服を着た、髪ボサボサの若いとはいえない女だし、ナンパの下心がありそうにも思えない。食事は一人でするより二人の方が楽しいに決まってる。

「いいわよ」

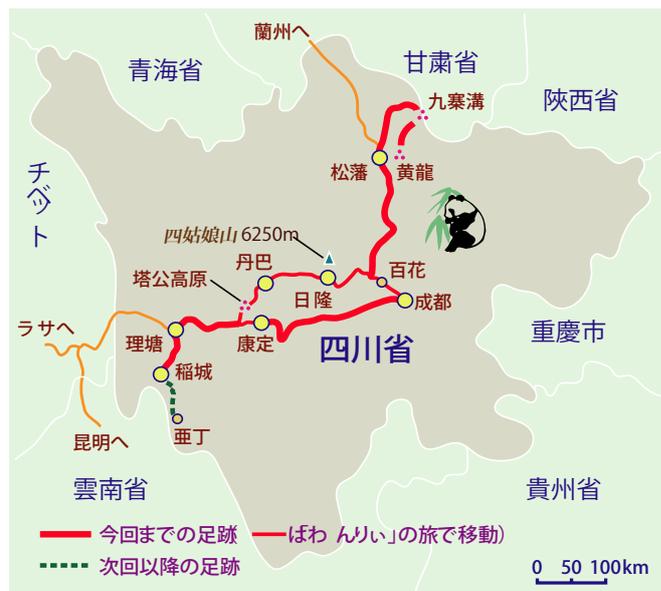
すると彼がそこに停めてあった車のドアを開けた。

「じゃあ、乗りなよ」

うーん……。外はすでに夕闇が迫ってきている時間だ。知らない土地で知らない人の車になんて乗っちゃっているのかなぁ……。又しても、その思いは心をよぎったが、とりあえず今のところ私は彼の客だし、街の中心までは一本道で、車で3分とかからない。まあ、いいか。私は彼の車の助手席に座った。

念のために断っておくと、知人もいない海外で、私は誘われれば誰にでもついて行ってしまいう訳ではない。ちゃんと自分なりに状況や相手を判断して信用するかしないかは決めている。それは相手の発散しているオーラのようなものを感じる事だ。信用ならない人間は目を見ればだいたい判るし、体全体から警告を発しているのが空気を通して感じられる。もちろん彼は普通に街の食堂に連れて行ってくれた。

稲城の街の夜は早く、日が落ちたばかりだということに大半の店はシャッターを下ろし始めている。何が食べたいか問われて「水餃子」と答えた私のため、彼は律儀に、一軒一軒まだ開いている食堂の前に車を止めては「おー



い!水餃子あるか〜!？」と大声で尋ね、三軒目にちゃんと水餃子のある店を見つけてくれた。

考えてみれば朝も同じものを食べていたのだが、もちりした皮に包まれた餃子が暖かいスープの中に浮かんでいる水餃子は、急いでいる時には手軽だし疲れている時でもスルスルのどを通して、何度食べても飽きないしハズレがない。

運転手のお兄ちゃんが水餃子のほかに数品の料理を頼んで二人で分けて食べた。食堂の支払いは割り勘のもりだったが、結局彼が支払ってくれてしまった。これじゃあ彼の商売は全然儲かりそうにない。

店を出ると、ちょっと買い物があるからと、お兄ちゃんは数軒先の雑貨屋に入ってしまった。彼を待ちながら既に夕闇につつまれた稲城の街をぼんやりと見回す。ここまで来ると街の中の看板も殆どチベットの文字で書かれている。

何処からかムツとするような血生臭いにおいが流れてきたのでフと見ると、私の立っている雑貨屋の脇の歩道でヤギを解体しているのだ。歩道のふちには切り取られたばかりと見られるヤギの頭が並んでいる。思わずギョッとしたが、これは庶民の生活の中で日常的に行われている普通の事なのだろう。そう思うとさほど残酷だとか気持ち悪いとは感じられない。商店街の真ん中でヤギの解体とはさすが山賊の街だ。

買い物を済ませて車に戻るとお兄ちゃんが聞いた。「他にほどこに行きたいところはある?」

うーんと・・・それなら、「串焼きが食べたい」と私は言った。実はさつき食堂に行く途中、街角の暗がりにはテントが張られて串焼き屋が店を出しているのが車の中から見えていた。

中国では「串拷(チアツ・材)」と呼ばれるその串焼きは四川省の名物なのか、今まで私が訪れた何処の街にも必ずあった。夕方暗くなり始める頃にどこからかやってきて、屋台の上に肉や野菜、豆腐、魚などさまざまな素材を串に刺した物をたくさん並べて店を出す。裸電球に照らされたそれらの中から、客は好きなものを選んで店主に渡すとその場で焼いてくれるのだ。

塩、コショウに四川省名物の山椒の粉や、さまざまな香辛料のきいた味付けはたまたまなく美味しく、散歩の合間に二、三本買って歩きながら食べたり、成都の街ではビールケースの上に乘せたベニヤ板をテーブルに、風呂場の腰掛のような椅子に座って、宿で知り合った日本人の旅行者達とビールに串焼きで夜更けまで旅の話で盛り上がったものだ。松藩では広東兄妹や桂林女史とこの串焼き屋台を何軒もはしごして歩いたし、四姑娘山の麓の街でも登山メンバーとこの串焼を買い食いしたのは楽しい思い出だ。暗い夜道で闇を照らす裸電球の光の温かみと夜風に吹かれて美味しい物を食べる楽しさは格別で、この屋台を見かけると私は素通りできなくなってしまふのだ。

運転手のお兄ちゃんは内心「ゲッ、まだ食べるの？」と思ったようだが、私が先ほど見かけたテントに連れて行ってくれた。

テントの中は口の字型に仕切られた客席の前に炭が熾してあり、真ん中に店主が座って客の差し出す串を焼いている。串焼き屋のテントは盛況で、先客でほぼ満席状態だった。他に夜の娯楽もなさそうなこの街で、この串拷のテントは街の居酒屋のような役割をしているのではないだろうか。薄暗い裸電球と炭火の明かりに照らされている串焼き屋のお客達の顔はみんな楽しそうに見えた。私たちはかるうじて空いていたテントの隅を詰めてもらって並んで座った。

一番好きな羊肉の串焼きを二本取り、あなたは何を食べる？とドライバーのお兄ちゃんに聞くと、「満腹だから何も要らない」と言っていたが、そのうちにまん丸のジャガイモを揚げたのを一つ取り上げ、更に炭火でちょっと焼いて、

「君はジャガイモを食べないの？この土地のジャガイモは美味^{うま}い事で有名なんだぜ」

と、口に放り込んだ。あ、ジャガイモがジャガイモを

食べてる。心の中でこっそり苦笑する。向かいに座っていたチベット服姿の年配の女性が、目が合うと笑いかけてくる。何か話しかけてくるが言葉がわからない。ドライバーのお兄ちゃんが「彼女は日本人なんだよ」と説明すると、頷いてまたニコニコ笑った。屋台はこの感じがいいんだよねえ・・・。二本の串焼きを味わって食べた。

「他に何を食べる？」

お兄ちゃんに聞かれたが、もともとお腹はいっぱいだったし、このテントに来られた事で満足していた。

「もう要らない」

と言うと、彼は

「気が済んだ？じゃあ、帰ろうか。明日は垂丁に行くんだし」

とサッサとお金を払ってテントから出てしまった。

ここでは私が払うつもりだったので、慌ててお金を渡そうとしても彼は受け取らない。なんだか悪い事しちゃったなあ。色々奢らせちゃった上に、ナンパどころか早く帰りたかったのは彼の方だったらしい。

青年旅舎まで送ってもらうと、明日の朝8時に迎えに来てもらう約束をしてドライバーのお兄ちゃんと別れた。

個室状態のドミトリーに帰ると、ホウツとため息がもれる。何だか今、自分が稲城にいるのがウソみたいだ。明日には垂丁に行かれるなんて。ここまですべて順調にきてしまった。初めはホンの二週間程度の旅行でみんなと一緒に日本に帰るつもりだった事を思うと不思議な気持ちだ。

さあ、垂丁に行くための準備をしなくちゃ。私はやにわに荷物の整理に取り掛かり始めた。山の中のキャンプ場に泊まるのだから、余分な物は少しでも減らしたい。不要な物は一つにまとめてこの宿に預かってもらうつもりだ。逆に垂丁で必要な物は忘れないようにしなくっちゃ。

慎重に荷物をより分ける。前回垂丁を訪れた時期より丁度一ヶ月遅れているので、高山での寒さが心配だった。ダウンのシュラフに、ダウンのパンツ。夜になれば電灯など無いのでヘッドランプは必需品だし、寒さに備えて四姑娘山の使い残りのホカロンは全部持っていこう。お湯を注ぐだけで食べられるアルファ米の携帯食に、パスポートとお金・・・お金？ え？ お金！？

思わず息を呑んだ。

「・・・うわーっ！！！！ お金が無ーい！！！！」

そう。この時、私は大失策を犯していた事に気がついたのだった。

【次号に続く】

ジェフリーパウワーの別荘訪問記

1995年の夏、コロombo市内ゴールロードに面したベアフットと云う、ちょっと気の効いた民芸品やお土産の置いてある店の地下にある本屋で、面白い本はないかと何冊かの本をめくっている時にベントータにあるジェフリーパウワーの別荘を題材にした写真集に巡り会いました。

写真集の見開きページには手書きの宝捜しの様な別荘までの地図が記載されていました。この地図を頼りに友人達と別荘を訪問してみようという事になったのが今回の記事の始まりです。この本屋さんにはスリランカに関する面白い本がたくさんあるのでお勧めの場所です。本屋さんだけでなくベアフットの店自体も洒落たお土産を探すのを楽しめるし、喫茶室もあるので散歩の途中で一休みの場所としてもお勧めです。

ジェフリーパウワー(1919年～2003年)はスリランカを代表する建築デザイナーで、国会議事堂をはじめとして多くの官庁建物、カンダラマホテル等の高級ホテルを設計し、東洋のガウディと呼ばれていました。コロombo市内のバガッタレーロード(Bagatalle Rd.)にあった自宅、ベアフットから歩いて直ぐの場所にあったアトリエ(現在はパラダイスロード・ザ・ギャラリーと云うレストラン兼ショップ)、市内各所にある個人住宅やマンションなどでパウワーのユニークなデザインを見る事が出来ます。この他にパウワーは国内に何箇所かの別荘を持っており、いずれも面白いデザインです。このなかで代表的な別荘が今回のベントータ近郊にある別荘です。この場所はLunuganga(ルヌガンガ)と呼ばれ、現在はこの地にパウワーの遺骨が眠っています。余談ですが1995年当時、コロombo日本人学校はジェフリーパウワーの自宅の近所にありました。日本人学校の所在地にしてはユニークな地名でしたね。

コロomboを車で出発し海岸線に沿ってゴールロードを60kmほど南にドライブするとベントータに着きます。コロombo～ベントータ間にも興味深い場所がたくさんあるので機会があれば紹介したいと思います。

ベントータは海岸線沿いにリゾートホテルが点在し、スリランカ人の新婚旅行先、欧米人のバカンス地として人気の高い場所です。目的の別荘は街中からベントータ川沿いに10kmほど内陸に入ったルヌガンガ湖畔にありました。コロomboからベントータまでは海岸線に沿って進むために道を間違えようがありませんが、ベントータからが難関でした。手書きの地図ではベントータから別荘までは曲がりくねってはいても、ほぼ一本道になっていたのですが実

際には全く違って地図を信用したのが失敗でした。

その他にも失敗の連続で、そもそもシンハラ語をほとんど喋れない日本人だけで出かけるなんて無謀な冒険だし、スリランカの多くの人達が地図を読む事が出来ないと云う事を知っていたにも拘わらず何度も道を聞いた事などです。

スリランカでは英語が都市部ではかなり通用するのですが、地方ではほとんど通じなくなります。この時も道を聞いたといっても地図を見せての筆談に近い会話でした。さらに悪い事にスリランカの人達には悪気はないのですが、たとえ道を知らなくても知らないとは言わない事です。地図上の現在地も判らない、方角も判らないのに自信をもった手ぶりで直進だ、右だ、左だと教えてくれます。その度に目的地から遠くなります。また周囲の景色も、何処を走っても同じ様な集落と田畑が広がっていて、私達もしだいに方向感覚が狂ってきました。同じ家の前を何度も通るので、庭で涼んでいた家人が心配してわざわざ家の外まで出てきてくれるのですが、そのたびに悩んだ挙句に前回とは違う方向を教えてくれたりします。結局は村の周辺をグルグルただけで目的地には到着できません。

ベントータ周辺の田舎道は全て走破したのではないかと思うほど走った後で漸く別荘に到着しました。なんと、そこは何度も間近まで来ては村人の指示で違う方向に曲がった交差点をまっすぐ行ったところにありました。看板などの目印はありませんでしたが、広い前庭と駐車場がある大きなお屋敷なのに、何故近所の人達がスリランカで一番の建築家の別荘の場所を知らないのかと思いましたが、「スリランカだからしかたないか」という事で妙に納得してしまいました。

駐車場に車を残して前庭に入っても人がいる気配はありません。勝手に散策しながら庭を横切って母屋に近づくと初老の紳士が母屋から出てきました。当家の執事だと名乗り、私達のようなアポイントもなしに飛び込んできた無礼な外国人に対して、本当に親切に相手をして下さいました。主人は別荘に滞在しており、昼寝中なので目覚めたらお茶を一緒にしましょうと言ってくれました。氏が目覚めるまでの間、別荘の中を案内してもらいましたが、東洋のガウディと呼ばれているのに相応しく風変わりな建物でした。

氏が遊び心で設計したのでしょうか、客用の部屋は大樹の枝の上に設けられており、居間はオブジェだらけ、テ

ラスの手すりはタイル張りで波打っているといった感じ
です。トイレは今から10年以上前のスリランカ、しかもベン
トータの片田舎だというのに全て洋式水洗便器が施され
ていました。

湖に面した広大な庭は氏の弟が設計したそうですが、氏
が設計したトライトンホテルやカンダラマホテルのランド
スケープと同じで湖の水面と庭の池が一体化するように
設計されていて、とんでもないスケールの別荘である事に
驚愕した事を今でも覚えています。

氏が目覚めてから居間でお茶を一緒にいただき話をす
る機会を得ましたが、何を話したのか全てを思い出せない
ほど感激しました。既にこの頃には歩行が困難になってい
て移動には日本製の電動カートを使っていたのですが、その
日は居間から湖を見渡せるテラスまで執事さんの手を借
りてゆっくり歩いて移動し、この別荘の設計コンセプトを
説明して下さいました。

例の手書きの地図は氏が自ら描いたそうです。これほど
偉大な建築デザイナーでも地図を書くのは苦手なようで、
僕としては氏の間人味を感じる事が出来てちょっと嬉しく
なりました。スリランカに何度も行って、行く所が無くなっ
たら訪問すると面白い場所のひとつですよ！ 残念なが
らジェフリーバウワーは2003年に他界しましたが、別荘
は The Lununga Trustの手によって管理されていて現在で
も見学する事が出来ます。

教訓としては、知らない場所には現地語を喋れる人と行
く事、「手書きの地図」とスリランカの人の「良く知っている
」には注意しましょうと云う事でしょうか！

中国語で歌おう！ 8月の歌

xuěróng huā
「雪绒花」 作曲：R/ロジャース
訳詩：章珍芳

xuěróng huā xuěróng huā
雪绒花 雪绒花

měitiān qīngchén huānyíng wǒ
每天清晨欢迎我

xiǎo ér bái chún yòu měi
小而白 纯又美

zǒng hěn gāoxìng yùjiàn wǒ
总很高兴遇见我

xuě sì de huāduǒ shēnqíng kāifàng
雪似的花朵深情开放

yuàn yǒngyuǎn xiānyàn fēnfāng
愿永远鲜艳芬芳

xuěróng huā xuěróng huā
雪绒花 雪绒花

wéi/wèi wǒ zǔguó zhùfú ba
为我祖国祝福吧

松本杏花さんの俳句

niān huā wēixiào
《拈花微笑》より

* 6月号より新しい句集「余情残心」からの抜粋になりました。

席入りの歩幅小さく呂の着物

pǐnmíng bǎ shī fù
品茗把诗赋
rù xí qīng nuó xiǎo bù fú
入席轻挪小步幅
luó shā hé fú sù
罗纱和服素

季语：罗纱、夏。

赏析：此首及以下二首均为参加品茗诗
会时所作。

品茗赋诗、可谓是一种闲情逸致。日本
的茶道、有一套严格的操作程序。行外
人看是繁文缛节、爱好者则将此作为修
身养性的一种方法。

作者多才多艺、即是俳人、又是茶道、
花道的老师、还热爱书法、所以才能参
加这品茗诗会。此句生动地描写了作者
的心态之沉稳、举止之文雅。

風通り水荃清し懐紙かな

chá shì fēng tōngchàng
茶室风通畅

笔迹清秀锋毫爽

宣纸诗兴漾

季语：通风、夏。

赏析：日式建筑多拉门、只要将相对应的
拉门拉开、就会出现“穿堂风”。

这对风于墨迹很有好处。日语中的“怀
纸”是一种特制的和歌稿纸、因我国尚
无对应词、姑且译成宣纸。

读了此句、犹如身在茶室观赏：屋中飘
逸着茶香和墨香、良好的通风条件使书
法作品迅速风干、白纸黑字、清清爽爽、
给人一种惬意的感觉。

日本のメディアでも「ワーキング・プア」という言葉が目立つようになってきた。「働く貧困層」と訳されていることが多い。日本の場合は、バブル経済が崩壊して以後の企業のコスト削減などによる非正社員の採用が増加し、「働きながらも貧困状態の人々」が生まれたことが要因として挙げられている。

この言葉を世界中にもっとも有名にしたのが、2005年8月末にアメリカで起こったハリケーンカトリーナの災害であったように思う。先進国アメリカにも貧困層が多く存在していたということ、そして彼らのほとんどが仕事を持つ「働く貧困層」であったことは驚きであった。ルイジアナのニューオーリンズのロウワー・ナインス・ワードという地域には、奴隷貿易によってアフリカから連れられて来たアフリカ系アメリカ人が多く被災し、隣町へ出る費用すらなく取り残されたという。アメリカの貧困者層は、3590万人とも言われ人口の13%を占めている。その定義は、年収が9573ドル以下(日本円にして115万円)とされていてアメリカの見えない貧困層の存在を世界中に明らかにした。

世界銀行が出している世界開発報告書によると、貧困の定義は、年収が370ドルであり、33%の開発途上国人口を占める。また極度の貧困となると、年収275ドル以下で、18%を占める。アメリカ貧困層との年収と比べるとその違いはかなり大きく感じるが、世界開発報告書で報告されている国々とアメリカとの経済格差と通貨の価値を考えると生活レベルは同じようなものだ。先進国、途上国を問わず、貧困層は存在していて、その大きな共通点は、「ワーキングプア」であるということだ。

アフリカでの「ワーキングプア」の存在は新しいことではない。途上国経済を知る手段として完全失業率の数値が良く使われるが、問題は失業者がどれだけいるかではなくて、就業していても貧困な人々がどのくらいいるかを知ることが重要になってくる。1日を1ドル以下で暮らすの人々の存在。ケニアでも失業率は、40%とも50%とも言われているが、そもそも会社に属することだけが就労していることではない経済にあって、就業率・失業率がどれほどの意味を持つかは疑問である。

ジュア・カリと呼ばれ、あらゆるものを手作りする職人たちの姿、朝から晩まで、沢山の子供を抱えながら路

上で野菜や果物を売るお母さんの姿、学校も行かずのみを集めたり新聞を売る子供達の姿。みんな働いている。経済の底辺を確実に担っている。いなくては困る存在。しかし、働いても貧困から抜け出せることは非常に難しい経済社会環境。「一生懸命働いているのに、ワーキングプアである」という事実。

先日CNNのアフリカを扱ったニュースで、アフリカ諸国の経済成長率は平均して7.8%になったと伝えていた。また戦争、インフラ等のリスクは高いにしろ投資先として、多くのリターンが見込めるとの報道であった。確かに、私の2年前買ったケニアの民営化した企業の株の幾つかのうち、大きなもので200%の増益となっていた。

アフリカを投資先としてみるヨーロッパ諸国、アメリカ、特に中国の最近の動きは激しいものがある。特に中国は、援助も投資に有利に働くように戦略的に行動している。「ワーキングプア」が減らない状況と高い経済成長率、外国からの投資熱、すべてが矛盾していながらもグローバル化経済の中で、アフリカの個人個人の暮らしが豊かになっていく可能性を感じることができるのか?と問われれば私は楽観視することは出来ないと思う。実際に、私が知る人々の生活は数年前から何も変わっていない。

そんな状況を踏まえて、アフリカンコネクションは、日本で活動して頂いたお金で2006年11月「マイクロ・ファイナンス(小規模融資活動)」を始めた。日本円にして8000円ほどを、何かビジネスを始めたい人に貸し出すというものだ。ナイロビから2時間ほどのニエリから少し離れた村に住む人々から事業計画書を募り、5名に貸し付けた。返済期限は1年後。元本だけを返済することを約束する契約書をかわした。内容は、鶏や豚を飼って、卵や肉として売るビジネス。畑で使う肥料を売るビジネス、冷凍庫を購入し、食材を預かるサービスを提供するビジネス、産地の野菜を遠くで売るビジネスなど農村ならではのアイデアが集まった。私には、それぞれの小さなビジネスが成功するかどうか分からない。元本も戻ってくるかどうか分からない。しばらくは、見守りだけの活動となりそうだ。

「ワーキングプア」という単語がなくなることを願いながら・・・。



料理のデモンストレーションをするロサリタさん・右端

昨年に続く2度目のインドネシア料理講座。今年の手ごろ価格となったココナッツミルクの利用にポイントを置いたインドネシア料理を指導いただきました。講師は昨年度も講師を務めてくださった和光大学経済学部助教授夫人のロサリタさん。恒例となった夏前のエスニック料理・公開講座で、'わんりい'会員と一般参加者併せて28名が、ココナッツミルクたっぷりのカレーやココ

ナッツミルク味のインドネシア風チマキなどなどに挑戦しました。

カレー料理をメインメニューとした料理講座は、インドカレーに始まって、ネパール、タイ、ミャンマー料理などに続く5回目の開催。アフリカのカレーを、町田のわいわい祭りで食べたこともあります。カレー料理はインドを中心に周辺に広がって、それぞれの国の代表料理に近い物になっているようです。それぞれスパイスの種類も分量も微妙に異なり、それぞれ美味しく、その国独自の味わいになっているのが面白いです。日本のカレーももともとは明治時代にイギリス経由で伝わったようですが、既にしっかり日本味です。

2000年夏、内モンゴルの小学校を再建する事業に'わんりい'がかかわり、開校式に招かれて何人かのメンバー達が内モンゴルを訪れました。羊肉でカレーを作ってモンゴルの人たちと食べようという話が出てカレールーを沢山用意して行きました。新鮮な羊肉を乾燥牛糞でじわりと煮込み、広大な青空の下で食べたカレーは、私達には素敵に美味しかったのですが、現地の人たちは黄色いどろりとした料理を気持ち悪がって誰も食べてくれませんでした。内モンゴルは兎も角も中国圏ではカレーはあまり一般的ではなかったようで何年前、「ハウス食品」が上海で自社カレールーを売り込む目的の試食会をしたというニュースを読んだ記憶があります。日本帰りの中国人も多く、その後じわじわとカレー人気が高まっていると聞いています。いずれ中国でも中国風カレー味が確立し、各家庭の定番料理の一つになるのでしょうか。

そんなことを感じた今回のインドネシア料理講習会でした。



《'わんりい'掲示板》

◆七夕中国音楽ライブ

「天女の響き」- 東方清花アンサンブル

2007年7月7日(土) 18:30開演 2000円

於：入谷・英信寺(下谷七福神 大黒天)
台東区下谷2-5-14 ☎03-3872-2356

地下鉄日比谷線・入谷下車3分/JR鶯谷・下車6分

劉鋒(二胡) ウェイウェイ(中国琵琶) 成燕娟(楊琴)

申込み&問合せ：中国音楽社

☎03-5701-9588 携帯：090-3097-4695

◆モンゴルの障害児支援の七夕チャリティコンサート

モンゴルの風

2007年7月6日(金) 19:00開演

於：ルーテル市ヶ谷センター
新宿区市ヶ谷左土原町1-1 ☎03-3260-8621

地下鉄南北線・有楽町線市ヶ谷駅徒歩1分

JR総武線市ヶ谷駅徒歩5分

前売：2500円(当日：3000円) 全席自由

バータルジャヴ・ボルドーエルデネ(ホーミー)

アヨーシ・バトエルデネ(馬頭琴)

バトナサン・マンダブイン(賛助出演・司会)

主催：NPO法人ニンジン

申込み&問合せ：FAX 03-3553-7056 (ニンジン事務局)

*ニンジンは、モンゴル語で「人道的な」という意味で、モンゴルの障害者との交流・支援の輪から広がり、人間的な社会の実現を目指すと設立されたNOPです。

◆天唱大地

騰格尔音楽世界 (TENGER&蒼狼楽隊)

2007年9月8日(土) 18:30(開場17:30)

於：東京藝術劇場大ホール(JR池袋駅西口徒歩1分)
S席5000円 A席4000円 B席3000円 C席2000円

主催：モンゴル民族文化基金

問合せ：☎090-3506-6803 チョクト

チケット：京藝術劇場チケットサービス ☎03-5391-6337

中国陝北・黄土高原に思いを寄せる二つの絵画展

今年の夏は、期せずして'わんりい'と関わり深い二人の作家によって、中国黄土高原地帯をテーマにした個展が開催されます。一つは、黄土高原来信「陝北紀実」・「陝北女娃」でお馴染みの中国人作家・周路氏による個展、もう一つは'わんりい'会員で、二紀展に連続出品していた平島克子さんの個展です。

ゴビの砂漠からの黄砂が300万年以上かけて降り積もってきたという黄土高原地帯。中国文明の発祥地といわれながら開放後の発展目覚しく変化する中国においていまだ発展とも変化とも無縁のままのようです。黄土の丘陵に立ち、中国の興亡の歴史を織り込んで四方に果てしなく打ちつづく風景を目にするとき、人は自ずと己の小ささを感じ、謙虚になり、悠久の時の流れを肌で感じるに違いありません。

二人は、黄土高原の風土と人々の生活に深い関心と思いを寄せ、長年それぞれの角度から黄土高原をテーマに作家活動を続けてきました。二人とも基本的にそれぞれの個展会場に会期中詰めております。言葉を交わしながら鑑賞していただければと存じます。(田井)

【平島克子油絵展】(SM～50号まで20点余り)

2007年7月18日(水)～23日(月)
10:00～19:00(初日13:00より、最終日18:00まで)
於：町田市民ホール第一ギャラリー

1984年以来、陝西省、河南省、山西省を取材し、20年余り黄土地方の人々や風景を描いてきた。描きながら、古代の人々へさまざまな思いを馳せてきた。昨年5月、初めて諸葛孔明の最期の地・五丈原を訪れた。そこは殆ど訪れる人もない静か過ぎるような村で、そこで見た山羊や豚、畑の雀、猫、そして畑を耕す親子を描いたが、千数百年前の何年にもわたる戦いはなんだったのだろうか。

五丈原は陝西省岐県にあるが、その北側(周原)では、現在大規模な発掘調査(西周王墓群?)が行われ、今後の発掘によっては、史書の伝える西周が誤りでなく、正確であったことが明らかになる。そのことを思いつつ二枚の絵を描いた。兵馬俑は5度目、乾陵は3度目であるが周辺の変わりようには驚きよりも落胆の気持ちを感じ、歴史の重さを一層意識しながら描いた。(平島克子)



【平島克子氏略歴】

- 1940 神戸に生まれる
- 1964 早稲田大学卒業
- 1984～2000 二紀展出品(東京二紀賞、二紀展奨励賞受賞)入選15回
- 2000 多摩秀作美術展出品
- 2001 「日・仏・中現代美術世界展」入選(北京)
- 2006 世界堂絵画大賞展入選
- 1984～2007 中国旅行 7回
- 1991～2005 個展8回



JR横浜線町田駅ルミネ口徒歩10分
小田急線町田駅西口改札口徒歩7分

*駐車場はありませんので、近隣の一般駐車場をご利用下さい。

町田市民ホール

(財)町田市文化・国際交流財団
194-0022 町田市森野2-2-36
☎ 042-728-4300

7月8月の定例会予定は1ページに掲載。8月は'わんりい'のお休み月です。9月に元気でお会いしましょう!

久遠的郷土Ⅲ '黄土風'

【周路新作絶版木版画展】

中国美術家協会会員 中国版画家協会会員 安徽財經大学教授
絶版木版画：一枚の板を彫り進めながら色を重ねてゆく木版画新技法

2007年8月16日(木)～21日(火)
11:00～19:00(初日14:00より、最終日17:00まで)
於：世界観ギャラリー

〒101-0052 千代田区神田小川13-28-13 ☎ 03-3293-6334

- 協力：世界観ギャラリー 日中文化交流市民サークル'わんりい'



【周路氏略歴】

- 1956 出生/中国安徽省合肥市在住
- 1980 安徽省院西学院美術科卒業/中学教師・大学講師・合肥市群衆芸術館学芸員歴任
- 1992～1994 来日東京SNZ版画研究所研修
- 2001～2003 陝西省延川県文化局副局長として現地へ赴任
- 2006/9 安徽財經大学教授就任、現在に至る
- 作品入選：中国全国美術展(第7、8、10回各展) 中国全国版画展(第9、11、12、15、16回各展)
- 1999 中国版画協会「魯迅版画賞」受賞
- 作品収録：中国現代美術全集版画巻、中国優秀版画家作品選集、二十世紀中国百年版画展 中国版画年鑑
- 作品收藏：中国美術館、広州美術館、深圳美術館、四川神州版画美術館、青島美術館、哈尔滨版画博物館、日本国千葉県立美術館、広島王舎城美術館



世界観ギャラリーへの行き方

- ◆ JR・お茶の水駅/聖橋口下車 徒歩5分
- ◆ 地下鉄千代田線・新お茶の水駅B3徒歩4分
- ◆ 地下鉄都営新宿線・小川町駅B5徒歩4分
- ◆ 地下鉄都営三田線・神保町駅A5徒歩7分

●お問合せ：

ギャラリー 間瀬 ☎ 03-3233-0204
'わんりい' 田井 ☎ 042-734-5100